

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 95 号

平成 22 年 3 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第二部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波文庫）より（10）

6 月 2 日

すべての国民的な、あるいは家庭的な風俗や習慣は、もともと、何か一般的に善い意味を持っているものである。さもないと、それらはおよそ風俗とはなりえなかったであろう。

われわれはその意味を発見するように努めなくてはならない。まだそのような意味があるかぎり、その習慣を守りつづけるがよい。なぜなら、習慣というものはものごとを容易にするからだ。けれどもそれらがその意義と精神とを失ってしまったら、まだその習慣がいかにも神聖そうな顔つきをしていますが、席をゆずらねばならない。

6 月 4 日

あなたはいつもあなたの身分に応じて、簡素に、しかしきちんとした身なりを整えるように心掛けなさい。「なげやり」な服装は、ことに外国では、目立ちすぎるおしゃれと同じように、避くべきものである。なぜなら、残念ながら、われわれはある国民の一人として、ほかならぬわれわれの身なりによって評価されるからである。

6月8日

あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない。だからほかの人のように眠っていないで、目を覚まして慎んでいよう。眠る者は夜眠り、酔うものは夜酔うのである。しかしわたしたちは昼の者なのだから、信仰と愛との胸当てを身につけ、救いの望みのかぶとをかぶって、慎んでいよう。神はわたしたちを怒りにあわせるように定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救いを得るように定められたのである。(テサロニケ 5・5 - 9)

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。(テサロニケ 5・16,17)
あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申しあげるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう。(ピリピ 4・4 - 7)

さて、われわれは幾度も生活と努力との新しい出発を繰り返さねばならないが、いよいよその最後の新しい出発がやってくる。いまやあなたは神学書や哲学書に読みふけることを、いわばすっかりやめてしまってよろしい。もう実行にふさわしいほど十分に力がついている。実行こそは、いつか未来の国において、われわれの唯一の務めとなるであろう。そこではもはや、教会も書物も説教もなく、ただ生活と実行とがあるだけであり、この地上では苦しい努力の成果であったものが、そこではもうわれわれの自明な本性となっていることであろう。「主よ、わたしたちはあなたの救いを待ち望む」(創世記 49・18、詩篇 109・26)

6月11日

わたしに従ってきなさい。そしてその死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。(マタイ 8・22)

それ自体まさしく善である多くのものが過ぎ去ってゆく。われわれはそれらを過ぎ去るにまかせるほかはなく、いつまでもくり返させたいと思っはならない。生活は必ず不断の進歩であって、すでにあつたものの単なる反復であつてはならない。最後の日まで、その日その日がひとつの創造であるべきだろう。

6月18日

今日でも、現代の諸国民の教育資料から聖書的要素を除き去り、ゲーテ、シラー、プラトン、孔子、そのたの「偉人」の言葉をもつてそれに代えることができると思つてゐる人たちがいる。そのような人びとは、今日の書物の中で、聖書からの引用に出会うたびにつまづいてしまふ。けれどもマタイによる福音書 17 の 27 の「彼らをつまづかせないために」という主の言葉は、たしかに金銭上の問題その他のささいな事柄にはあてはまるが、このような場合にはあてはまらない。聖書をよく知り、絶えずそれを読むことは、決してどうでもよい事柄ではないのである。むしろわれわれは聖書に基づいて自己を測り、判断し、はげまし、かつあらゆる「人間的な、あまりに人間的な」ものから遠ざかるようにしなければならない。ゲーテも、その最初の頃のままで、聖書を捨てなかつたなら、おそらく別人になつたであらう。彼がどんなに「生の楽しみを尽くした」にせよ、聖書へのあこがれは決して彼の心を去らなかつた。

こういう問題がふたたび大いに論ぜられる時代が今にやつて来るだろう。その時あなたを聖書から引き離そうとする人たちに従わぬがよろしい。そこには決して祝福が宿らない。われわれはその内的生命の根を、外的成長とともに伸ばすことはできないし、あるいは、良種の木の幹に異種の枝を罰なしに接ぎ木することもできない。

6月19日

もしあなたが、いまちょうど、生涯の荒涼とした暗い時期の一つにのぞんでいるのなら、将来のいろんな計画に手をつけたり、または、いまさらどこを改めようもないのに、過去のことをふりかえって思いわずらったりしてはならない。むしろなにか実際的な仕事を企てるがよい。そのことがあなたを十分忙しくさせ、無益な期待の苦しみをあなたから取り去ってくれる。そうしているとある日突然、おそらくあなたがまだその仕事をすっかり終えない前に、あなたが願っていた心の変化が訪れてくる。

7月4日

この世で最良のものは何であるかを、あなたは知りたいのか。それは、神のそば近くあること、精神と肉体との健康、よき結婚、よき国民性と教会、生計をみたすに足るよき職業、よき友人、立派な教養、生涯の主要部分がよき時代に出会うこと、できればその上に、聖霊の賜物の一つ(治病・慰め・預言の力など)を受けられることなどが、それである。ただしこの賜物はさらに一層必要なものへの大きな添え物に過ぎない。人生の幸福にぜひとも必要なのは、ただ第一にあげたもの(神のそば近くにあること)だけであって、これがなければ、むしろ生まれて来ない方がましであろう。というのは、ほかのすべてを合わせても、それだけではだれの人生にもつきまとう苦悩や困難をつぐなうに足らず、また、神の友たりうるという確信がなければ、もう一度この人生をやり直してみたいと願う人はあるまいから。

7月2日

すべての時代、すべての民族の文献全体の中で、この上なく精神ゆたかで、倫理的に価値の高いものは、あの数千年にわたる文書の集成であり、「聖書」という名で、きわめてよく知られているように見える書物である。もっとも、実際には、教養ある人で聖書の内容をあまりよくは知らないものがたくさんいるのだが。ほかの諸民族の宗教書は、これとは到底比べ物にならない。たとえば、エピクテトスの語録や、古代ストア哲学の粹を含むマルクス・アウレリウスの自省録や、プラトンの対話篇や、インドのマハバーラタ(注)や、その中の最もすぐれたバガヴァト・ギータ(聖簿加梵歌)や、さらに孔子の論語やマホメット教の全文書にしても、みなそうである。特にコーランは、聖書に比べてひどく見劣りのする、ほとんど乱雑とさえ見える書物である。

それゆえ、聖書によってその精神を形成し、絶えず育ててきた諸民族が、精神文化の面で最大の進歩を遂げたことは、単に人間的に見ても十分うなずけることである。しかしそれと教会の諸制度とを混同してはならない。教会の制度はかならずしも聖書の精神に合致するものではなく、また民族によって大変違った発展を経験してきた。その制度はさまざまな人間的な弊害からたえず浄化され、改善されて然るべきものである。このような時代へ、われわれはふたたび向かっているように思われる。しかし、現代の大多数の人々にとって問題なのは、教会の組織ではなく、また現存の諸宗教の中のどれを選ぶかということでもなくて、むしろ、彼らは一体、人間特有の靈魂とその要求とをなおも認めるのか、それとも単に動物的欲望しか持たぬただの獣類の一種に墮落しても構わぬのかという問題である。自然科学的唯物論の最後の帰結は、どこまでも後者であろう。このような後退をば、すでに広い範囲にわたってもたらしたのは、じつに近代的世界観の進歩なのである。…

注 古代インドの宗教的叙事詩

7月3日

だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちのそとなる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの艱難は働いて、永遠の重い栄光をあふれるばかりにわたしたちに得させるからである。わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづく。(コリント 4:16 - 18)

「彼は必ず栄え、わたしは衰える、」(ヨハネによる福音書 3の 30)。洗礼者ヨハネのこの言葉は、すべて老いゆく人たちの、また、まさに来らんとする偉大な時代のすべての先駆者たちの、さけがたい運命を語っている。…そこに、まさに世界観の相違がはっきり現れている。まず第一に、現世がよりよき存在へ継続するという確信と、反対に、この世の生命はこれ限り完全に終るのだという悲しむべき見解…、これがこの二つの世界観の相違である。…正しい人生観を抱いていれば、肉体的なこの能力がたとえ減退しても、全体としてみるときは、精神の力や元気は衰えるどころか、信すべき伝記によれば、逆にしばしば、いちじるしく高まって、顔の表情にまでそれが表れるほどである。だから、老年におけるこのような補いは、確かに十分以上のものがある。コリント人への手紙 4の 16 - 18。

さらにいっそう高齡になって、目立つほど増進するのは、いわゆる第六感である。すなわち、単なる自然科学者の目にはすっかり隠されているが、実はわれわれを取り囲んでいる、あの霊の世界を見る力がそれである。また、われわれの足元から次第にすぎさって、ついには視界の外に消えてゆくこの世界の将来をも、よりよく見透す力が、それと結びついている。…たとえばカント、スペンサー、エマソン、ゲーテ、ビスマルクなどの高齡期に、本当に来世へ移りゆく折りのこのような随伴現象について、まるで聞くことがないのは、むしろ不思議である。真の偉人の伝記は、このような現象についての記述をもって終るべきであろうに。

7月8日

神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事が益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。(ロマ 8・28)

人生の幸福というものを、もっぱら喜びや苦しみがのこす単なる感情によって判断するならば、結局は、ショウペンハウアや彼と同じ傾向の哲学者たちのペシミズムが正しいということになるだろう。なぜなら、苦しみはどんな喜びよりも、ずっと強い消えがたい跡を記憶のうちに残すからだ。

しかし、それとは別の、はるかにまさった考え方は、人間をその最高の進歩に近づかせるものを幸福と呼ぶ見方である。この考え方によれば、同じ理由からして、苦難の時期こそが人を内的に進歩させる最大のはたらきをするので、それが幸福なのだという結論に達する。使徒パウロの晩年の数通の手紙は(あのとりわけ美しいヘブル人への手紙はしばらくこれに数えなくても*)このような意味でついには幸・不幸を完全にのり越えたひとりの人間の姿を示しており、また「神を愛する者たちには、万事が益となるに違いない」(ローマ人への手紙 8 の 28)という彼の実に有名な言葉が、彼自身において完たき真理となっている。われわれもまた、そのようになることができるのである。

*この手紙はパウロの筆になるものではないという説が一般的であるためだろうか。(訳者注)

7月20日

一体に、計画を立てるということは、なんの役にも立たないことが多いものだ。待つこと、そして神のさずけ給う機会に注意を怠らず、与えられたらその機会をすばやく、すすんで、十分の心構えをもってつかむこと、これが成功をおさめる道である。

7月31日

イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。

(マルコ 15・39)

あなたが体の力をもいたわり、できるだけそれを維持しようとして、そのために医師のよき助言を用うるのは、たしかに、全く当然のことである。というのは、この生命を投げ捨ててよいわけがないからだ。しかし、老年時における主要事は、おそらく肉体の生命の維持ではなくて、別の力をできるだけ強めることであろう。それは死にもうち勝ちうる力、つまり、精神力を十分に保ちながら元気よく人間を死につかしめる力である。ちょうどキリストについて確かな根拠をもって語られているように。(マルコによる福音書 15 の 39) これについては、通常、医師はあまり知ろうとしない、なぜなら、今のところまだ、それは彼らの講義ノートに記されていないからだ。しかし、そのようなことは、たしかにありうる事だが、ただ残念ながら、それはあまりにも稀にしか見られない事実である。かようなより高い生命と、来世の力とを、少しも自分のうちに待たない高齢者というのは、自分にとっても、他人にとっても、よろこばしい姿ではない。結局、自他いずれにとっても重荷に過ぎないことがよくある。あなたはそのような羽目に陥ってはならない。

8月4日

本当に心やさしい人に出会うということは、職業上多くの人と接する庶民階級の人たち(たとえば、あらゆる種類の商人、郵便配達人、郵便局員、銀行員、車掌など)にとっては、まことに重苦しく単調になりがちな彼らの生活の中にさし込む一条の陽の光も同然である。だが、彼らにこのささやかな喜びを与えようと、だれが思いつくだらう。なるほど、ひとは彼らの奉仕に対して支払いをするが、それ以上彼らに何も負い目がないのだろうか！

8月5日

あなたは毎朝を、かならずつねによき考えをもって始めなさい。ただ心配やためいきをもって、ではなく。そうすれば、一日中なほほどかの陽の光を持ちつづけ、それで雲影を払うことができるだろう。

8月8日

わざとらしい心づかいは、それを受ける側に必ずしもこころよい感じを与えるとは限らない。しかし親切な一言、いや、やさしいほんの一瞥(いちべつ)だけでもひとに与えたり、または、適当と思われるときは、ささやかな贈り物をしたりするための、どんな機会をも逃してはならない。わたしは生涯のうちただ一度だけ、ある貧しげな様子の老人から、そのような施し物を、たいへん気持ちのよい微笑を受けながらも、ことわられた思い出を持っている。それでも、目的はやはり果たされたのである。

8月29日

人生の幸福な時期というのは、要するに、仕事に没頭している時である。「説教集のうえに身をかがめ、あたたかな暖炉のそばに」腰かけている正直者のタム*だとか、…または、前世紀のある時期に出された書物によくある型の「おだやかな」牧師や立派な老教育家など、このような感傷的な人物像は、常に単なる空想の産物であるか、それともいづれにせよ、現代のわれわれの社会では、もはや真実とはなりえないものである。最後の息を引き取るまで活動的であることが、現世の生活の意義であり、モットーである。学者や聖職者たちにとってすら、そうである　これがわれわれ人間の運命であるならば！

*スコットランドの大詩人口バート・バーンズ(1759 - 96)の物語「タム・オ・シャンター」の主人公をさすのであろうか。

9月1日

「天才が大事業を始め、
勤労のみがそれを仕上げる。」

この言葉は残念ながら、必ずしも文字通りに正しいとはいえない。天才的な人々は彼らの最初の考えを、それを仕上げていく全段階を通して、そのまま持ちつづけることをしない。そういうことは彼らを退屈させ、そのためしばしば、もとの考えにまで影響して、ほかの方にそれたりする。そこで、彼らはむしろそれを断片のままに残してしまう。これに反して、偉大な「勤労者」たちには、天才が欠けていることが多い。彼らはただ手本に従って仕事をするに過ぎないのだ。だから、すでにドイツかフランスか、それともイギリスかアメリカにあって評判のよかった物を、まねすることができない場合は、彼らはすっかり途方に暮れてしまう。

この両者のある意味での中間の道は、仕事の仕上げとくり返しをするやり方である。いつまでも資料集めに日を過ごすことなく、まず、最初の腹案のまま急いで大ざっぱにやっておいて、それからふたたびそれに掛かり、だんだんよくして行くこと、このやり方はしばしば性急な人々にも、たいへんうまく成功するものである。印刷される仕事の場合には、いくどもそれに修正を加えることによって、極めてたやすくやりとげることができる。ひとはだれでも、いろいろためしてみても、自分の一番よい仕事のやり方を見つけなくてはならない。